長井雅樂詳傳

『周布政之助』と並んで長州政治家の双璧と呼ばれ、幕末激動の我が国政界に「航海遠略策」をひっさげて登場。時に利あらず、一言の弁解もなく非業の死をとげた、謎の政治家・長井雅楽の全生涯。

限定二百部・特装版

マツノ書店

『長井雅楽詳傳』を推す

武士の生き様という意味で長井雅楽ほど
武士らしい生涯を持った人物はいない！

奈良本辰也

幕末の政治史を語るにはそれぞれの大きな人物がいる。佐久間象山・勝海舟・西郷隆盛・木戸孝允・岩倉具視・一橋慶喜・島津斉彬、もちろん吉田松陰・横井小楠・坂本竜馬も忘れてはならない。

そして、それらの人物にはこれまで多くの評伝があり、あらゆる角度から考察され叙述されてきた。しかしながら、それらの人物に伍して譲ることのない人物で、殆ど無視されているような傑物に長井雅楽がある。

長井雅楽は、文政二年（一八一九）萩の郊外の松本村に生れた。父が四歳のときに亡くなり、藩の規定で三百石が半分の百五十石として相続を許されたのである。百五十石と言えば、高杉晋作の父小忠太も同じ禄高であった。

明倫館に学んで藩主の側役となったが、その頃からめきめきと頭角を現わし、周布政之助と並んで長州政治家の双璧と呼ばれるほどになった。そして「智弁随一」の名は、まさに彼の頭上に輝いていたのである。

のちに彼のことを「青面の鬼」といって憎んだ吉田松陰でさえも、周布と並べて最も有能な政治家として認めている。確かに彼は、冷静で理解力があり、屈指の理論家であった。彼の前に出てその議論を聞けば、何人もこれに匹敵するものはないという程に説得力も持っていた。

長州藩は表高三十六萬石の藩である。しかし、その頃になると実高は百万石を超えていたであろう。三百諸侯と言われる諸藩のなかでも五指を出ない大藩であった。しかし、国内における発言力はそれほどではないのである。安政年間の将軍継嗣問題でも、その大きな争いのなかに長州藩毛利敬親の名は出てこない。

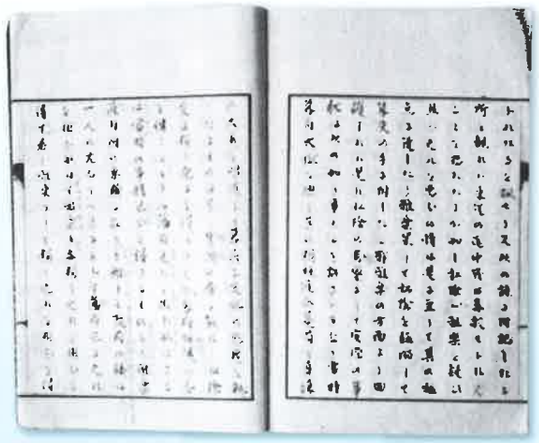
安政の大獄に吉田松陰が連座して斬られたが、これは直接の原因たる継嗣問題や密勅降下による罪科ではなかった。江戸召喚の理由も「梅田雲浜との関係」と「御所のなかの落とし文の筆者たちの嫌疑」であって、それ以上のものではなかった。全く個人的な問題なのである。

ついでに言うと、この松陰の江戸送りに使者として選ばれたのが長井雅楽であった。松陰が雅楽を「青面の鬼」と罵ったのはこのときであり、松陰門下の若者たちから仇敵のように憎まれる原因をつくったのが、雅樂のこの任務に由来している。当時、周布政之助も江戸にいたのだから、政之助でも良い筈だった。これが政之助だったらどうなるだろうというのが私の秘かな関心である。

それはともかく、安政の大獄の報復のように行なわれた万延元年（一八六〇）三月三日の井伊直弼の暗殺で、国内の政治は四分五裂の状態になる。井伊に代わって老中首座となったのは安藤対馬守だった。対馬守は政局の安定を公武合体にありとして和宮の降嫁を奏請し、その実現に全力を払った。

婚姻政策という最も古い手が対馬守の政治だった。しかし、新しい時代の到来を予知し、これまでの攘夷一辺倒を転換させて、広く国民の眼を世界に広げようと思い立ったのが長井雅楽である。

長井雅楽墓（萩市海潮寺）


同上本文 48 頁記載分

毛利家文庫「長井雅楽詳伝」全 6 巻（山口県文書館）

長井家旧宅門（萩市土原山中町）

国内の与論は、単なる扇動ではなく、世界に通じる公理によって統一されなければならない。そこで彼は、「航海遠略策」なるものを唱導し、一藩をあげて政局に打って出ることを進言した。徳富蘇峰をして感激の言葉を連ねさせたその大文章は、いま読んでみても素晴しい。

長州藩は、この「策」を持って藩論とし、朝廷と幕府の間に周旋することを決意した。長井雅楽が責任者として、京都と江戸の間を奔走することになる。朝廷を説いては時の天皇の信頼を得、幕閣に説いては老中久世大和守の賛同をとりつけた。そして、遂には将軍家の同意まで得る。「航海遠略策」は、公武合体の要めとして、ほぼ、九〇％の実現をみるところにまで進んできた。長州藩はこのとき、国内の政局を左右する第一の実力者に成り上がっていた。

長井雅楽が、そして彼の存在が長州藩の名を一世に高からしめたのである。しかし、「航海遠略策」は、松陰門下の久坂玄瑞をはじめとして、薩摩や水戸など多くの尊攘派志士の反対するところであった。

（中　略）

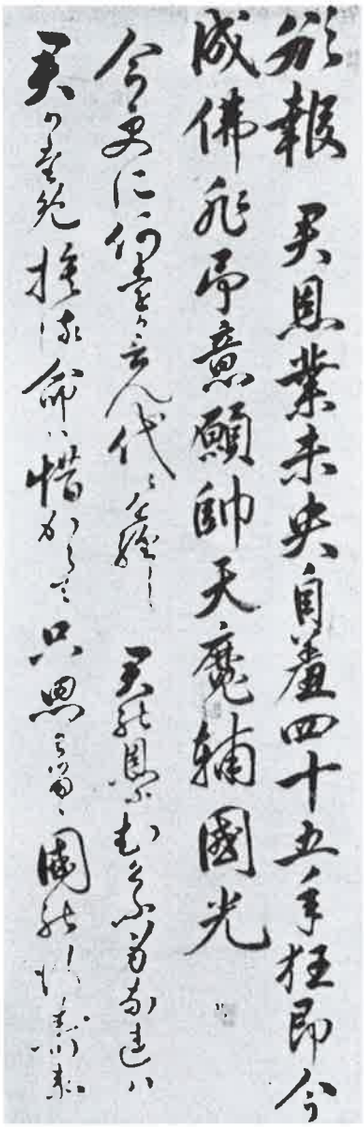
長州藩は、やがて百八十度の転換を行なって、公武合体策から尊王、攘夷の第一線に立つ決心をするのである。政策の転換は雅楽を切腹に追い込んでゆく。享年四十五歳。惜しみても余りある英傑の死であった。

私は、あの時期に一言の弁解を遂げるまでもなく死んでいった雅楽の最期にひどく感動したものである。先年『もう一つの維新』という歴史小説を書き、長井雅楽の一生を文章にしたのも、あの最期の見事さ、いや凄絶さからきている。ところで、私が『もう一つの維新』を書いて長井雅楽の一生をたどったとき、最も良い参考となったのは中原邦平氏の稿本『長井雅楽詳傳』だった。三坂圭治氏に教えられてその稿本が山口県文書館にあることを知り、早速に駆けつけて、多くの雅楽関係の史料とともに、それを見たときの思い出は今も忘れられない。

中原邦平氏の『長井雅楽詳傳』は、氏の毛筆になるのだが、それは優に一冊の本を造って充分なほどにある。大切な史料が随所に散りばめられ、歴史の研究者にとっても十二分に価値あるものである。他にも多くの著書のある中原氏であるが、しかし、この稿はそれらのうちでも最も、力のこもったものであろう。

この稿本が今日に至るまで印刷に附せられなかったということは不思議と言ってよい位のものだ。恐らく、松陰門下の反撥を考えての遠慮もあったのだろう。山県有朋などは、最期まで雅楽の叙勲や贈位に反対していたというから、長州ではそうした遠慮が通用したとしか思えない。

しかし、長州藩の本当の歴史を知ろうとすれば、松陰門下だけではなくて長井雅楽のような人物も忘れてはならないのである。このたび、中原氏の稿本が活字となって世に出るという。私は、この挙を進められたマツノ書店に大いに感謝する。



長井雅楽辞世（長井家所蔵）

『長井雅楽詳傳』目次

①緒　論
②世系及家庭
③教育及出身
④世子の保伝
⑤開鎖論の紛擾と朝廷幕府の乖離
⑥密勅の降下及戊午の大獄
⑦雅楽の直目付　雅楽と吉田松陰との関係
⑧上巳変後の形勢　雅楽の内献白藩論の一定
⑨雅楽の使命　雅楽の上京
⑩雅楽の東下及周旋
⑪雅楽の復命　藩主の東観　雅楽と周布政之助の関係
⑫藩主の着府　雅楽の周旋　雅楽上京の命
⑬雅楽の上京　島津和泉の着阪形勢の激変
⑭雅楽の東帰　島津和泉の入京（付伏見寺田屋の変）世子長門守の上京
⑮藩主上京の準備　将軍上洛の建議　雅楽の周旋　藩内壮士の弾劾状　雅楽の待罪
⑯藩主の上京　雅楽の帰国　壮士の激励
⑰藩論の一変　藩主父子の奉勅　雅楽の罷免及罪案　俗論の紛起
⑱雅楽の最後
⑲結　論

▼本書は今から三十六年も前に小社で初めて活字化し、とても良く売れ、早くから入手困難な本になっていました。▼でも内容的には自信満々でしたが外装が今一で、気になっていました。▼今回は限定復刻で、装丁に充分気を遣い立派なお買得本です。ぜひ「予約特価」でお求め下さい。

■体　裁　A5判上製函入・二七二頁
■予約特価　七千円（税・送料別）
■定　価　八千円（税・送料別）
■特価締切　27年6月10日（厳守）
■発　売　27年7月上旬予定
限定二百部復刻（番号入）
▼書店不卸　▼締切厳守　▼返本OK
●セット特価をご利用下さい。
山口県周南市銀座2～13
☎〇八三四㉑二一九五
マツノ書店
URL http://www.matuno.com

内容見本
（原寸大）

第一　緒論

玉を暗夜に投ずれば、行人怒て剣を按ず。玉の能く人を怒らすにあらず。之を投ずる、其の時にあらざるに由る。衆囂々鎖攘を論ずるの時に方り、独り開交を唱ふ。是れ殆ど暗夜に投ずるの玉なり。佐久間修理・長井雅楽の如きは、乃ち其人にあらずや。修理の開交を説く、大言壮語時と人とを撰はず、口と筆とに任せて揮擢す。是れ玉を乱打するなり。玉を乱打する固より人を怒らすに足る。昔、卞和璞を献ず。人以て石と為して之を刖きる。修理の開交論は、猶ほ玉の璞に在るを免れず。而も其の璞を乱打する此の如し。人の視て以て石となさゞるを希ふ。豈に得べけんや。雅楽の開交論も亦固より璞玉たりと雖ども、稍々切磋琢磨の工夫を具へ、之を献ずるにも其の人と其の時とを撰びたるが如し。而も猶ほ身を殺すの禍を免れず。名論卓識を世に行はんとする、何ぞ其れ難きや。蓋し、世間の広き具眼の士無きにあらず。時勢の然らしむる所亦已むを得ざるなり。（我藩内に於ても周布政之助吉田寅次郎等の意見を観よ）時勢とは何ぞ、輿論の趨勢也。輿論の趨勢は国民最多数の意向が奔流する所にして、最少数なる名論卓識を葬るの墓地たるを知らざるべからず。嗚呼卞和刖られて、而して連城の璧天下に伝ふ。修理・雅楽殺されて開交の説終に世に行はる。然り而して、予特に深く雅楽の為めに悲むものあり。

雅楽が我邦家の為め時艱を救済せんと欲し、朝廷幕府の間に立ちて周旋したるは、如何なる時ぞ。嘉永癸丑の年、米艦渡航以来、外交の難問題が幕府の頭上に墜下したると同時に、将軍継嗣の紛議は徳川氏の内政にまで騒擾

第八　上巳変後の形勢　雅楽の内献白　藩論の一定

前回に記しゝ如く、雅楽は安政五年十二月江戸に至りしより、世子を輔けて枢密の用務に鞅掌しつゝありしが、藩主慶親公は翌六年三月五日、萩城を発して参勤の程に上り、四月五日を以て江戸に着す。藩公既に着府したるを以て、世子は暇を幕府に請ひ、五月二十八日を以て帰国の途に上る。同年十二月、藩公中将昇任の慶あり。翌万延元年、公将に国に就き、世子をして東上せしめんとす。乃ち雅楽に帰国を命じ、記録所役を兼ねしむ。蓋し、世子の東上に随はしめんとするなり。時に公、物を朝廷に献して中将昇任の恩を謝せんとす。因て、雅楽をして帰路京師に入り、藩邸の留守居福原与三兵衛と協議して之れを処理せしむ。雅楽は正月二十三日を以て江戸を発し、京師の用務を辨じたる後、二月十二日に至り、萩に帰着したり。（此の時朝廷へは花瓶一個白羽二重百四の代料金百参拾弐貫目を献納せりと云ふ。）

是の年三月三日、井伊大老桜田門外に於て刺客の手に斃る。之を上巳の変と称す。是より海内益々騒然たり。其の二十二日、世子萩を発して参府の途に上り、閏三月二十八日を以て江戸に着す。雅楽は清水美作・国司治人・毛利登人等と共に之に扈従す。世子已に参府するを以て、公は四月二十六日、江戸を発して帰国の途に上り、六月十一日、萩城に帰る。雅楽又之に扈従す。其の後九月、公務を帯びて江戸に赴き、十月に致り又国に帰る。（在府中水戸藩美濃部新蔵の書翰に接したる事あり、詳細は第十一回周布政之助と関係の条に記す。）当時井伊大老既に斃れ、老中安藤対馬守首として幕政を執り、内外の事務を担任す。尋で、久世大和守・松平豊前守等入て老中と為り、相共ニ井伊氏の苛政を除き、以て人心を収攬せ